彼岸花

白雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
彼岸花

【Ｎコード】
Ｎ６７０３Ｓ

【作者名】
白雪

【あらすじ】
２人の子供が担任教師の遺体を発見したところから物語が始まります。
両親がいなくても幸せだった。優しい姉が大好きで、仲のいい友達がいて・・・。そんな幸せな時がずっと続くと思っていた。それなのに、幸せが崩れる足音が聞こえてきた。
事件が解決した時に、知った真実とは・・・？シリアスで決して明るい話ではありませんし、ハッピーエンドともいえません。それでも、楽しんで読んでいただけますように努力しますので、感想な

どいただけると嬉しいです。

００：プロローグ

斉藤心はけたたましくなるチャイムの音で目を覚ました。時計に目をやる。朝の８時をさしていた。今日は休みなのでせめて１０時過ぎまでは寝ているつもりだったのに。

「なんだよ、こんな朝っぱらに」

それほど早い時間でも、非常識な時間でもないが、ゆっくり寝ているはずの朝に起されたことに心は心なしか不機嫌な声を出す。

今日は生徒が２人、遊びに来るといっていたが、それも午後のはずだ。今の心には他に尋ねてくる人間など思い浮かばない。

心は相手を確かめることも無く扉を開けた。物騒な事件が起こっている世の中でそれはあまりに無用心なことだった。それをいくら後悔したところで過去を変えることなど出来ないが。

扉の向こうに立っていたのは見覚えの無い男だった。というより顔が見えないように深く帽子を被っており、黒いコードを羽織っているために誰か判別できないといった方がいいかもしれない。

黒い帽子に黒いコード、そして黒い手袋・・・その上大き目の包丁、とくれば怪しい事この上ない。だが寝起きで寝ぼけていた心は一瞬の判断が遅れた。

気がついたらその場にうずくまっていた。痛みが体中を襲う。腹部からどくどくと流れ出ている血に心は床を這うように後ずさりした。未だに包丁を振り回している男に対し、恐怖で声が凍り付いて

いるかのようだった。

「な・・・・ん・・・・」

逃げようともがく心は、帽子の中に隠れた男の顔を見た。目を見張り、諦めたように溜息を吐く。

「ああ・・・・」

ぐったりとその場に倒れこんだ。逃げようという意志は男の正体を認識すると同時に消えている。

頭に浮かんだのは中学の制服に身を包んだ少女。自分の傲慢な振る舞いに傷つけられたのは彼女だけではないだろう。もう、何年も前の話で、何故、今更・・・・。そんな思いが頭をかける。だが、同時に死ぬことを受け入れた自分がいた。

「ここ・・・・・あ・・・・・・」

最後に呟いた言葉は、あの少女を呼ぶものではなかった。そのことに対する罪悪感も何も無く、再び襲った痛みと共に、心の意識は永遠の闇へと消えうせた。

０１：学校の先生

「心愛！？」

耳元で大声で呼びかけられ、心愛はぼんやりと目を開けた。眠気で再びその場に突っ伏してしまいそうだ。

「起きなさい」

布団が剥ぎ取られ、寒さにしぶしぶと置きだす。時計に目をやれば、朝１０時を回ったところだ。低血圧の心愛にとって、土曜日の朝１０時は早朝といえる時間だ。

「今日・・・土曜日・・・」

「希ちゃんと出かけるんじゃないの？私は今日はこれから仕事だから、もう起せないわよ」

呆れたように言われ、心愛は昨日姉の穂波に朝起してから出かけてくれるように頼んでおいたのを思い出した。

「あーーー。忘れてた」

いまだ眠気眼でベッドから這い出す。再び寝てしまったら最後、絶対に出かける時間までに起きる事が出来ないだろう。

「あるこ～あるこ～私は元気～・・・・・」

希と心愛は人通りがさほど多くない道を手を繋いで歩いていた。大きな声で歌うのを忘れない。山中でのクマ対策というわけではなく、ただ単に楽しいから・・・・だが。

そんな2人の様子は通りがかりの人は暖かな目で見つめている。

不意に心愛が立ち止まった。笑顔だった表情は凍りつき、何か嫌なものを見るような目をしている。突然の心愛の態度の変化に希が驚いたように振り向いた。

「心愛？どうしたの？先生の家、もうすぐだよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・血の臭い」

警察官をしている穂波は時折血の臭いや腐臭をつけて帰ってくることがある。はじめは気がつかなかった臭いも、穂波が慌ててお風呂に入り、洗い流そうとするその様子を見ているうちに、だんだんとわかるようになって来た。嬉しいことではないが、心愛は血の臭いや死体の腐臭には一際敏感なのだ。幼い頃からのその環境のせいだろう。

希が驚いたような表情を浮かべた。心愛の鼻がいいのはよく知っている。そして血の臭いをかぎ分ける様は、まるで警察犬のようだ。

「心愛！？」

走り出した心愛に希が慌ててついていった。心愛の顔に嫌な表情が浮かんでいる。希の顔も次第に変化していった。心愛が向かっているのは、今日2人が向かう予定だった先生の家の方だった。

どうか違う家であるようにという願いは、心愛がその家の入り口で立ち止まった事で簡単に否定された。

恐怖の表情を浮かべている心愛の背後から覗き込んだ希は恐怖が喉元からわきあがってくる。

普段の希からは考えられないほどの大きな悲鳴が口から迸り出た。

玄関のすぐ内側は血の海だった。何箇所も刺された人であったものが、横たわっている。

希の意識は急激に遠退いていった。

02：第一発見者

「はい、捜査一課」

電話に出ている新藤勝の前に湯のみに入った緑茶を持ってきた穂波は驚いた様な表情で湯のみを机に置くという動作の途中で不自然に止まった。

新藤勝警部はノンキャリアからののし上がりでやり手と称されている穂波の直属の上司であり、警察官としての澤井穂波を育てたのは他でもないこの人だ。穂波が警察組織に入って7，8年は経過しているがその間ずっと勝についていた。にもかかわらず、穂波は勝が笑ったり、怒ったり、驚いたりという表情を浮かべているのを見たことは一度も無い。いつもむっつりと黙り込み、何を聞いても、何を話しても決して表情を変えることはない。誉める時も怒る時も全く同じ表情というのはどうなのかとも思うが。

そんな勝が今、小さく眉をひそめ。未見にしわを寄せている。世間一般で怒るか驚くかしている時の表情だ。

勝と目があった。電話を切った勝は穂波からいまだ机に置かれていない湯のみを取り上げるとおもむろに口を開いた。

「殺人事件だ。現場に急行する」

さっき電話中に見せていた驚きだか怒りだといった表情は既に消えていた。

「はい」

小さなカバンを持ち上げ、急ぎ足で勝の後を追う。

「澤井」

「はい？」

穂波の顔を見た勝はどこか困ったような表情を浮かべている。こんな風にころころと表情を変える勝を見たのは穂波だけかもしれない。

「今回殺されたのは、小学校の先生だ。めったざしで血の海に転がっているのを小学校の生徒の２人組が見つけた」

穂波は黙って話を聞いていた。勝は普段運転をすることになっている穂波を無理やり助手席に押し込み、自らハンドルを取った。そのとっぴな行動を見た穂波はなんとなく、これは穂波にとってひどく動揺するような内容のことが入っているのだろうと感じていた。

「その第１発見者の内の１人だが・・・・澤井の妹だそうだ」

「え・・・。」

何かあるとは思ってたがここまでの話とは予想外だった。あんぐりと口をあけた穂波は「新藤警部が運転したのは正解だったな」などとどうでもいい感想がグルグルと回っていた。

「・・・・２人と言いました・・・・よね？」

「ああ。１人はさっきも言ったがお前の妹の澤井心愛。もう１人は

その友人で・・・・・・・」

「霧島・・・・希・・・・ですね」

少し掠れたような声で口にした穂波に勝は小さく頷いてみせる。

「ああ。よくわかったな」

「・・・・・・今日、心愛は希ちゃんと出かけましたから。・・・・・ところで警部、何故私を連れてきたのですか？」

身内が第一発見者ならば穂波は捜査を外されているはずだ。

「ああ。捜査員にお前の名前はない。だが、第一発見者の内の霧島希が遺体を見て気絶したらしい。澤井心愛のほうも落ち着きが無い。だから、知り合いのお前に落ち着かせてもらおうと考えてるんだろ」

惨殺死体など大人の・・・それも警察官でさえもしり込みしてしまう。それを見てしまったのだから倒れて当然だろう。

「わかりました」

「第一発見者に会う前に現場へ入れてくれ」

その場にいた警察の中に入るなり勝はそういった。頷いた事でよいとの返事を貰ったと解釈した勝は穂波を中に入れる。

暫く時間がたち、血も固まっているというのにそれが放つ臭いは凄まじく、警察官の中でもしり込みし、近づかないようにしている人間が何人もいる。これを子供が見たのかと思うと辟易した。

仏の方へ顔を向けた穂波の顔が傍でもわかるほど青ざめた。体の前で握り締めている両手が小刻みに震えている。

「先生〜」

「よ、澤井。いつも元気だなお前は」

耳に聞こえた声に穂波はぼんやりとあたりを眺める。だが、そこに人はいない。

「・・・・い。澤井」

「え・・・あ・・・すみません。第一発見者ですね」

強張った表情のまま隣の部屋へ足を運ぶ穂波を勝はなんともいえ

ない微妙な表情で見送った。

穂波が向かったのは、心愛と希が休ませて貰っている部屋だ。さすがに殺人事件のあった現場を何度も子供に見せるのは気が咎めたのだろう。管理人と話をつけ、同じ階の5部屋ほど間に挟んだ部屋へと2人を移している。ちょうどその日は休みということもあり、その部屋の住人が部屋にいたので、事情を説明し2人を入れてもらった。

中に入るといまだ苦悶の表情で眠っている希とぼんやりとしている心愛が目に入った。

「心愛」

そっと声をかけると、心愛が駆け寄ってきて、穂波に抱きついた。すぐにワーワーと泣き出す。ずっと我慢していたものが、姉の登場で溢れてきたのだろう。涙は次から次へと溢れてくる。

そんな心愛の背中をあやすように叩いている穂波はどこか遠くを見つめていた。まるで、何も見えないかのように。心愛も誰も、側にいないかのように、ただただ、空を見つめていた。その目に小さく涙が光っていたのに気がついた人間は一人もいない。

03：斉藤心

「田神は、本好きなのか？」

一心不乱に、周りを完全無視で本を読んでいた穂波は煩そうな表情を隠そうともせずに目を上げた。

見覚えはあるが、はっきりと名前が出てこない。

「・・・・・」

「一応お前のクラスでも英語教えてるんだけどな・・・。斉藤心だ。思い出したか？」

教科担任・・・どうりで見覚えがあるはずだと1人頷いた。その教科担任が一体全体何の用なのだろうか？

「何か、御用ですか？」

「お前さ、委員会も部活も入って無かったよな？図書委員やらない？」

本の貸し出し業務を主にしている図書委員。人づき合いが限りなく下手な穂波に出来るとは思えない。訝しげな表情で心を見上げると心は穂波が読んでいる本をトントンと軽く叩いた。

「今の時代本読む奴少ないだろ？お前さ読書感想文・・・という名の本の紹介コーナーしてみない？特技、生かせれば万々歳だろ？」

穂波は驚いたような表情を浮かべた。

いつも本を読んでいるせいで他者とのかかわりが稀薄な穂波はよく友達や父親に「気持ち悪い」といわれていた。本ばかり読んでいる可愛げのないつまらない奴ということなのだろう。理解者である母はよく本の話を面白いと聞いてくれるけれど。

「特技・・・ですか？」

「そ。お前の読書感想文面白いよ。いつもいいところできっているから続きが気になる。思わず本を買ってしまうんだ。簡単なストーリーはわかるのに一番大切なところは小出し。それも軽く触るだけ。それを特技といわずなんと言う。お前の書いた読書感想文を読んで本をかりに来た奴もいるしな」

すっと1枚の紙が差し出された。

「手始めにそれ、書いといて」

穂波が何かを言う前に心は慌てて席を立った。断る間を与えないつもりなのだろう。

そこには、本を開いたままボー然としている穂波と1枚の原稿用紙が残された。

「新藤警部、有給をいただけませんか？」

「有給？どのくらい？」

「今年残っている日数分」

坦々と言い切った穂波に勝が今まで目を通していた書類から顔を上げた。まっすぐと穂波をみてくる。

「2週間か。・・・・いいだろう」

「ありがとうございます」

穂波はゆっくりと礼をした。

「澤井」

部屋を出るときに勝が神妙な顔つきで声をかけてきた。その様子に穂波は思わず立ち止まり、振り向いてしまった。その事はいくら後悔しても、もう遅い。

穂波をみる勝は表情を一切変えていないが、眼の奥にある光が穂波の目にひどく鮮やかに映った。まるで何もかも知っているかのように。

「よけいな事はするな」

一言の注意。それだけで全てが見透かされているようで、穂波は

部屋を飛び出した。

昨日から、先生のことが頭から離れない。

穂波は両手をキツク握り締めた。

「・・・・さない。絶対に・・・・許さない」

その一瞬。ここに心愛や勝がいれば、穂波の中で何かが変わったことに気がついたかもしれない。そうすれば、最悪の未来を防ぐことが出来たかも知れない。それでもここにはその2人はいない。

破滅の足音は、ゆっくりと、それでも確実に穂波たちに迫っている。

０４：お葬式

「！？」

けたたましい目覚まし時計の音で心愛は慌てて目を覚ました。すっ飛んでいって時計の音を止める。隣の部屋から怒鳴り声が聞こえないかと耳を済ませたが、何も聞こえずほっと胸をなでおろした。

「お姉ちゃん？」

いつもならば心愛の部屋に目覚まし時計はない。今みたいな相当大きな音で時計を鳴らさなければ心愛は起きない。そのため出来る限り穂波が起すようにしているのだ。それが無理な時は事前に心愛に知らされている。確か昨日は何も言っていなかったはずだ。

心愛の声は狭い部屋の中でむなしく響いた。

「いないの？」

もう一度声をかけても何も返答はない。穂波の部屋にもどこにも誰もいなかった。

刑事をやっている以上何も言わずに朝いないことが全く無いとはいえない。たいていは起してひと言言っていくが、それも無理な時はリビングにメモ用紙が置いてある。今日はそのどちらも無かった。

心愛はギュっと手を強く握り締めた。なんとなく嫌な予感が心愛の中で広がっていく。

「心愛。どうしたの？」

いつの間にか希が部屋に上がってきていた。チャイムの音に、全く気がつかなかった。

「お姉ちゃんが・・・・いないの」

「・・・・先生の・・・・・事件の後だし、忙しいんじゃないの？」

「うん・・・・」

そうだろうと思う。それなのに心愛の中に巣くう不安が消える事はなかった。

穂波は多くの人に紛れ、ぼんやりとお経を聞いていた。だが、今日の目的はお葬式ではない。そもそも殺人事件で亡くなった心の遺体は司法解剖のために病院だ。今ここに遺体はない。遺族の、そして多くの人たちの望で、形だけの葬式を行っているに過ぎない。

「先生・・・・」

穂波の呟いた声は喧騒の中に消え、誰の耳にも届かない。溢れてきた涙をぬぐい、顔を上げた穂波は目的の人物を見つけた。やはり1人は離れた所に立っている。

「篠原先生」

深く帽子を被り、顔を隠しているかのように見える穂波に篠原澄は驚いたように顔を顰めたが、すぐに表情を崩した。

「・・・・・・・・田神・・・・」

「少し・・・いいですか？」

「ああ」

軽く頷いた篠原は軽い足取りで穂波を連れ立って会場を後にした。彼の目的も、もしかしたらお葬式ではなかったのかも知れない。そう思ってしまうほどに、足取りに迷いは無かった。

「お姉ちゃん！？」

会場を出てすぐに背後からかけられた声に、穂波と澄が同時に振り向く。隣で澄が息を飲むのがわかったが、それは無視して心愛に向き直る。

「心愛。どうしたの？」

心愛の表情は曇っていた。それなのに、懸命に何かを感じ取ろうとするかのように穂波の顔を見ている。そのまっすぐな瞳は、過去の自分を思い出し、穂波は軽く唇をかみ締めた。

「お姉ちゃん・・・今日は・・・帰って来るよね？」

不安げな表情。本来ならここで抱きしめて諭すべきなのだろう。

だが、今の穂波にそこまでの心の余裕はない。

「心愛、暫くの間希ちゃんの家に行っていて。後で希ちゃんのお母さんにも連絡しておくから。暫くは周りが煩いだろうし、その方がいいわ」

大きく見開かれた目から逃れるように、澄の腕を引いて、小走りでその場を後にした。後ろで心愛が呼ぶ声が聞こえたが、それに答えることなど、今の穂波にはできない。

「田神。あの子・・・・あの時の・・・・？」

「ええ。そうよ。“心を愛する”で心愛。・・・・・・私が先生を愛した証拠」

澄の目がこれ以上ないというほどに見開かれる。穂波はそれを無視して、絶対に逃げることが許さない瞳で、澄を問いただした。

「先生、聞きたいことがあります」

０５：一つ目の手がかり

澄が穂波を連れて行ったのはかつて穂波が通っていた中学、白泉女学園のすぐそばにある小さな喫茶店だった。少し奥まったところで店主が趣味の範囲で開いているお店だ。店主が別に仕事を持っていることも関係しているのか、ある日突然休みなどということも多々ある。そのため客はたまたま気がついた人間か、よほどこのお店を気に入っている人間くらいなものだ。

「アメリカンコーヒーとハーブティー」

お店に入るなり、澄は穂波の希望も聞かずに２つの飲み物を注文してしまった。穂波は軽く眉をひそめる。

「どうかしたのか？」

２人がけの席に腰掛、穂波の顔を覗き込んだ澄の問いに穂波は弱々しく微笑んだ。

「いえ・・・・。ただ、先生もよく、そうやって頼んでいたなと」

「・・・・・・・・あいつはあいつなりに田神の事は気に入っていた。前に一度聞いた事があるんだ。ハーブティー、まだ飲むよな？」

小さく頷いた穂波は軽く目を閉じた。脳裏に浮かぶ彼の顔はいつまでも色あせる事はない。

「アメリカンコーヒーとハーブティー」

勝手に注文して席についてしまった心を穂波は慌てて追いかけた。

「先・・・・・」

穂波が呼びかけようとするのを、心が身振りでとめる。

「呼び方。外でそれはまずいって」

「えっと・・・・」

カーーーッと頬に血が上るのがわかった。口をパクパクと開閉する。その様子に心が噴出した。

「お前ね・・・。ま、いいや好きにしろよ」

「ここ・・・いいお店ですね。」

穂波はキョロキョロとあたりを見回している。客層は様々だが、さほど人数が多くないからか、それともただ単に静かな人間だけが集まっているのか、まるで外の喧騒とは切り離されているかのように、この喫茶店だけが静かだ。

「ああ。お前、好きそうだからな。・・・・・・本来ならまずいんだが・・・・ま、ここならいいだろう」

まっすぐとこちらを見てくる綺麗な瞳に、穂波は突然恥ずかしく

なって俯いた。両手で包み込むように持ったカップの熱が両手に程よく伝わってくる。

心が小さく笑った声に穂波は軽く顔を上げた。

「穂波は可愛いな」

真顔で言われ、よけいに真っ赤になる。

こんな些細なやり取りが、本当に、本当に幸せだなと・・・穂波は心からの笑顔を顔に浮かべた。

「田神？」

澄の声に穂波は目を開いた。澄が不思議そうな、どこか心配そうな表情でこちらを見ている。

「先生に・・・初めてここに連れてきてもらった時の事、思い出していたんです」

穂波が軽く目を細めた。その表情は今にも泣きそうで、壊れそうで、澄は何も言うことが出来なかった。

「田神は・・・今何をしているんだ？」

話題を変えるための苦肉の策だった。でも、穂波の表情が過去を

悼むものから、今日久しぶりにあった時の強いものへと変化した。

「警察官です。・・・それと、今は田神では無くて澤井です。名前で呼んでくださって構いません」

穂波はカバンの横ポケットから掌大の大きさの手帳を取り出し、開いて見せた。写真と名前に目をやった澄が驚いているのがわかる。それもそうだろう、あの後にまさか穂波がまともな職についているなど想像もしていなかったに違いない。

「警察官・・・？」

「ええ」

「・・・じゃあ、心の捜査も？」

「いいえ」

穂波は軽く首を横に振って否を示した。

「捜査から外されましたから」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「心愛が第一発見者なんです。家族が第一発見者というのは外される大きな要因となりますから」

何もいわずにただ、穂波を見ている澄を穂波は尋問しているかのような厳しい目で睨みつけて再び口を開いた。

「捜査は外されましたけど、休暇をとりましたから独自調査中です」

「・・・・・・・・・・・・・・・1人で平気なのか？」

「私には警察組織が持っていない前知識がありますから。・・・・で、質問なんですけど、先生は何で小学校へうつったんですか？昔から小学校の先生になりたかったなどというのは嘘でしょう？」

警察が調べた心の転職理由は「昔から小学校教諭を目指していて、やっと空きが見つかったから」だった。だが、穂波はそんなことは信じない。心が小学校へ好き好んでいく理由が思いつかない。彼にとっては中学校がベストだったはずだ。特に白泉女子は心が求める「単純で騙しやすいお嬢様」が大量生息しているのだから。

「教えてくれるでしょう？まさか私の質問、無視しないですよね？」

容赦なく切り込むと澄は降参というように両手を上げ、しぶしぶと口を開いた。

「今から大体5年前か。あいつ、また生徒に手を出したんだ」

それ自体は驚かない。昔から心は何人もの生徒に同時に手を出していたのだから。

「で、お約束。その生徒が妊娠しちまった。降ろして終わりなら良かったんだが、その生徒は中絶手術後に飛び降り自殺をしている。自殺の原因は不明だが、「ごめんなさい」とだけ書かれた遺書は発見されている。・・・・・あいつの本性を知る人間、そして、あいつと彼女との関係を知る人間は簡単に想像が着くと思わないか？」

「・・・・・・・それで、辞めたんですか？」

「妊娠させるだけでは良心が全く痛まなかった心も、自殺されてはそうも言えなかったらしい。表向き何でもない振りして、小学校の教員試験を受けて突然転職した。・・・・それ以来女遊びもやめていたんだがな」

「・・・・・・・・・・先生、心愛の学校の先生だったみたいなんです。心愛のこと知っていたかな？」

「さあな、だが、お前のことも子供のことも忘れる事は出来なかったみたいだよ。」

「・・・・・・・・最後に一つ、その自殺した生徒の名前、なんていうんですか？」

「富岡・・・明子。」

ほぼ即答で返事がきた。澄にとっても忘れる事の出来ない事件だったのだろう。全てを知りつつ黙認していた澄もまた同罪なのだ。

０６：手に入れた証拠

「先生」

仕事をしている心を下から覗き込むように見ると、心は小さく笑みを浮かべ、穂波の頭を軽く叩いた。

「穂波。もうちょっと待ってな」

「はーい。あ、先生コーヒー飲む？入れようか？」

「ああ、頼む」

了承の答えを貰った穂波はパッと顔を輝かせた。さっき教えてもらったばかりの台所に足を踏み入れる。

初めて入る心の部屋は綺麗に整頓されていて、本当に心の部屋？と訝しく思うほどだ。穂波が知っているだけでも、心は決して整理整頓が得意な方ではない。心の研究室の机は乱雑としており、どこに何があるのか、心以外の人間にはわからないだろう。それでよく学年主任に怒られていた。

コーヒーメーカーはすぐ目に付いた。コーヒーメーカーを台の上におろす時に、隣にあったコーヒー豆が音を立てて床に落ちた。

「どうした？」

「ごめん。落としちゃった。片付けるね」

「割れたか？」

「平気。散らばっただけだから」

雑巾を片手に持ってしゃがみ込んだ穂波の表情が凍りついた。

床に髪の毛が落ちている。長い、女の人の髪の毛だ。

姉や母親のものだと思いたい。でも、心の奥底でそれは違うと囁きかけてくる声がした。

「それ、母親の。お前、何、気にしてるの？」

ゆっくりとしゃがみ込んだ心は、穂波の手を押さえ、穂波の唇に軽く触れるだけのキスを落とした。

「俺が、好きなのはお前だよ。信じろって。お前以外は家に入れないから」

先程よりも、長いキスに穂波は体の力を抜いた。もう、何も考えられない。

「穂波？」

「あ・・・ごめん」

穂波は耳元で呼びかけられ、夢想から呼び戻された。両手で持っ

ている小さな箱を握り締めた。

穂波にとって唯一と言ってもいい、友人の河合真砂が玄関口から穂波の顔を覗き込んでいる。

穂波は真砂について部屋の中に入った。ワンルームマンションにマニアックなものがずらり。今思い出していた先生の部屋とは似ても似つかなくて、小さな笑みを口元に浮かべた。

「よかった。今日、非番だったのね」

穂波は出された紅茶に口をつけ、ほっと息をついた。穂波と違い捜査から外されてはいないであろう鑑識課の刑事である真砂が家にいるかどうかはカケだった。

「ちょっと、一段落着いたからね。で？アンタ今休暇中でしょう？どうしたの？」

「これ」

穂波は何も言わずに手で握り締めていた小さな箱を真砂の前に差し出した。真砂はしばしそれを眺めていたが、手に取り、箱を開けた。箱の中を覗き込んだ真砂の表情が驚きに凍りついたのことに穂波は気がついた。

箱の中に入っているのは、一本の毛だ。人の髪の毛を取ってきたもの。

「これは？」

「それと同じ毛髪が現場近くに落ちていなかったか確かめて欲しいの」

「誰の髪の毛？」

穂波は答えない。長い長い沈黙。それに終わりを与えたのは真砂だった。

「・・・・・何を考えているのって、聞いても無駄だろうね。・・・・・・・そういう顔をしているあなたは何を言っても聞いてはくれないから。・・・・いいわ。少し時間頂戴。すぐに調べるから」

「ありがとう」

ほっとしたような笑顔。だが、その中に潜む本当の心を真砂は確かに感じ取った。

「穂波。あなたは1人じゃないわ。私や・・・新藤警部だっている、心愛ちゃんも、霧島さんたち家族だっているわ。1人で、抱え込まないで」

逡巡した後に漸く言えたひと言。それに穂波は答えなかった。

07：最愛の娘

穂波は、リビングにいた。生まれてから長い時を過ごしてきた場所で父である男性と母である女性を睨みつける。薄暗い家の中に嫌な沈黙が流れた。

父も母も・・・そして、家庭訪問（？）にやって来た中学での担任の先生、神宮藍華も、何も言わない。

「私、産むから」

その重苦しい沈黙を初めに破ったのは、静かな穂波の声だった。中学校の制服に身を包み、幼い顔立ちをしている穂波の年から想像することさえもできないほどにすっきりと、落ち着いた表情を顔に浮かべていた。何かを決意し、強い心を持った・・・まるで母親のような表情だ。

パーン

乾いた音が静かな部屋に響き渡った。顔を真っ赤にし怒り狂った父親はずっと、穂波にとって“澤井穂波”という存在全てを否定し続けてきた、はっきり言って苦手の部類に入る人間だ。ほんの数週間前までの穂波であれば、その表情に恐怖おののいた事だろう。だが、今の穂波にとって彼の存在は慰めにも恐怖にもならない。

穂波は父親の顔をまっすぐと見返した。にらみつけているかのように目を、鋭く吊り上げる。

「お父さま！？何を・・・」

藍華が慌てて穂波に駆け寄ってくる。

「煩い！？部外者が口を挟むな。これは我々家族の問題だ。即刻出て行け！？」

「いいえ」

怒鳴り散らしている父親とは対照的に藍華の顔には何の表情も浮かんではいなかった。

「なに・・・」

「いいえ。妊娠しているとわかっている娘に平気で手を上げる親の元にこの子を置いてはいけません」

「どうせ降ろすんだ、流産しようが俺の知った事か」

父親のいいように母親の顔がかすかに歪む。母として、同じように子を産んだ女として、簡単に見過ごす事の出来ない一線を父親は越えてしまった。

「お母さま。あなたはこれでいいんですか？確かに中学生という年で、ろくに避妊の知識も知らぬままに体をかさね、相手のわからない子供を産む。それは許される事ではないでしょう。ですが、あなたは、女でしょう。子供を産んだ親でしょう？それならば今の彼女がどれほど子供を愛しているのか、わかるはずじゃないんですか？あなた方に言う事が出来ない相手だったとしても、この子にとって、彼は、誰よりも愛しい人だったはずです。好きな人の子供を産みたい、それは、女なら誰もが願う願いなのではないんですか？子供を

奪うことではなく、共に育てていく事を考えてみてくれませんか？」

藍華が深く頭を下げる。穂波の目からは、いくつもの涙が流れ落ちた。

妊娠してからずっと・・・・先生に別れをきりだされ、騙されていたのだと気がついてからずっと・・・誰も味方になんてなってくれないと思っていた。

「駄目だ」

きっぱりと言い切った父親の態度に母が穂波を抱きしめた。その表情は強い決意をしたように見える。

「・・・・私は、穂波とおなかの子を守ります。・・・・確かに先生が言ったとおり穂波の行為は許されることでは無いわ。でも、私は、普段人とかかわりを持とうとしない自分の意見を口にすることが少ない穂波がここまで言っている、その願いを守りたい。私は、この子の母親よ」

「生むなら、離婚だ」

蔑むように母と穂波を見る父の前で、母がきっぱりと頷いた。

「構いません」

「穂波・・・・さん？」

どこか困ったように呼びかけられ、穂波は、夢想を切った。その時初めて頬をぬらす涙に気がついた。本当に、あの時からよく過去を思い出す。楽しい思い出も辛く悲しい思い出も。

穂波は涙をぬぐい、声の主に目を向けた。この場所へやってきて穂波に声をかける人間は1人しか知らない。

「呉羽さん」

それは予想通りの人物だった。藍華の妹である神宮呉羽。藍華が交通事故で命を落として5年。幼さが残る顔立ちをしていて、どこか子供だった呉羽は落ち着いた大人の表情をしている。確か穂波と同い年か、1つか2つ年上だったはずだ。そうなると大人に成長しているのは当たり前の事なのに、穂波はどこか異次元を見ているような錯覚に陥る。

「お久しぶり。姉のところによくこられていると住職さんから窺っていたのでいつかお礼をと思っておりましたの」

呉羽は涙のわけに触れなかった。穂波をよく知るわけではないし、葬式に時に1度会っただけなのに、穂波が抱えるものにもしかしたら気がついているのかもしれない、そんな気がした。

「お久しぶりです。・・・・・・先生には本当にお世話になりましたから。あの人は長く生きると何故か思い込んでいたのに・・・。10年前、中学生で妊娠した私が生むことが出来るように母を説得

してくれたのは先生だったんです。何で・・・・そんなことをしてくれたのか・・・未だにわからないんです。中学生が子供を産む。それを推奨してくれる大人、ましてや担任教師なんて・・・」

呉羽が驚いたような表情を浮かべた。穂波が突然過去を語りだしたことに対する驚きなのか、中学生で子供を産んだ事に対する嫌悪を含んだ驚きなのかはわからないが。

呉羽に語ったのが何故なのか、穂波にはわからない。ただ気がついたら言葉が出ていた。

「・・・・・・・・昔の私なら子供を産む親の気持ちなんて理解できません。でも、今私結婚して、姓を神宮から加賀に変えて、子供がいるんです。可愛くて可愛くてしょうがなくて、だから子供を産みたいって気持ちわかります。愛した人との子ならば特に。・・・・姉は特にそうだったんだと思います」

「え・・・？」

「一度妊娠して降ろしていますから。レイプされて出来た子供で、当時高校生でしたし愛せる自信も無かったと。でも、姉は亡くなる直前までその事を後悔していました。あの子にこの世界を見せてやりたかった、愛してやりたかった・・・と。きっと親とは、そういうものなんでしょうね」

目を細め笑った呉羽から穂波は目をそらした。そのまっすぐな瞳を見るのは辛い。

「きっと・・・私は親、失格でしょうね」

「え・・・？」

「呉羽さん。お願いがあります。私に何かあったとき、心愛・・・娘は父の元に行くことになるかもしれません。それだけは阻止してください。あの子には・・・・私と同じ思いはさせたくありません」

「穂波さん！？」

後ろから追いかけてくる声を、振り払うように、穂波は歩くスピードを上げた。

これ以上ここにいたら、よけいなことまで話してしまいそうだ。呉羽はどこか人を安心させ、全てをさらけ出してしまおうというそんな気にさせてくれる人だ。今の穂波にとって一番厄介な人間だった。

「心愛・・・ごめんね」

涙を流し、呟いた声は風に攫われて消えていった。

08：姉の消息

「新藤警部」

勝は書類を見ていた視線を上に上げた。

どこか緊張した面持ちで立っていたのは、同じ捜査一課の部下の神奈川志保巡査だ。顔と名前は知っているがそれ以外にかかわりが皆無。確か穂波と同い年だが就職してからの年数のせいなのか、どこか頼りない印象を受ける。

「何だ？」

未見にしわを寄せつつ尋ねると志保はビクリとおびえたような表情を浮かべた。勝からすれば決して怒っているわけではなく地顔なので、おびえられるのは些か不愉快だ。

「お客様です」

「俺に？」

尋ね人が来るなどという予定はない。予定もいれずに名指しで指名するような知り合いもいないはずだ。

「はい。あの・・・小学校の先生の殺害事件の第一発見者の女の子です。2人一緒に」

「わかった」

小さく頷いて、書類を机にしまうと、部署を出た。

「何か用か？」

応接室に入るなり何の挨拶もなしに突然切り出した勝に、心愛も希も何の感情も、表情も見せない。

その異様な光景に勝は小さく息を呑んだ。第一発見者として惨殺死体を目にした時、希は意識を失った。それは当たり前の反応だろう。だが、心愛のほうは悲しげな顔をしてはいたが、涙を流す事さえなかった。もちろん穂波が来てから大泣きしたのだからこらえていただけなのだろうが。そんな心愛が今にもなきそうな顔で、俯いており、希が心配げに心愛の顔を覗き込んでいる。

勝はできる限り、笑顔を浮かべようと努力はしたがすぐに断念した。勝には到底向かない仕種だ。

「何があった？」

前に腰を下ろし、質問を変える。

「お姉ちゃん・・・休みなんですか？」

「ああ」

「ずっと、帰ってこなくて・・・連絡も取れないから・・・ここにくればって思ってたんだけど・・・・・」

「初めてなのか？」

「え？」

突然の質問に希も心愛も顔を上げる。あまりに性急すぎて要点しか口にしていないことに気がつき、勝は一瞬顔を顰めた。

「すまない。警察官ならば何日も帰らないこともあるだろう」

現に捜査で何日も家に帰せないこともあった。その時幼い妹は幼馴染の家に預けていると言っていたのを良く覚えている。

「・・・帰って来ないだけなら・・・良くあります。でも・・・必ず1日に一回は希の家か・・・私の携帯に電話・・・それが無理ならメールくらいはくれます。でも、1週間音信不通なんです・・・。それに・・・先生のお葬式で会って・・・なんか様子がおかしかったんです。だから・・・」

キュッと唇をかみ締め俯いた心愛に勝は困ったような顔をした。子守は専門外だ。

「1週間。休暇をとったのもその頃だな。澤井心愛。今日は家に帰りなさい」

「でも・・・！？」

「ここにいても澤井が来るわけではない。俺の方からも連絡をとってみるし、空き時間に探しても見る。」

「・・・・・・・・・・・・」

「事件性がないから、今のところはこれが限度だ。・・・・ところ

で葬式で会ったのか？」

心愛が、コクリと頷く。

「様子が変だってって、どういう風に？」

心愛はあの時の様子を思い出すように天を仰いだ。確か・・・。

「お姉ちゃん、まるで、私を避けているみたいだったんです。それに・・・隣にいた男の人が私を見てひどく驚いていました。」

「驚く？それはどんな男？」

「喪服を着ていました。それから・・・・」

心愛はふと黙りこみ、カバンから小さなスケッチブックを取り出した。勝が上から覗き込むと、それにはたくさんの絵が書いてあった。風景画も人物画もよく特徴を捉えている。そこの新しいページに絵を書き出した心愛にはひどく驚いた。まさか小学生が書いた絵だとは想像もしていなかった。

「たしか、こんな感じの人です」

鉛筆ですぐに描かれた絵は、よく人の特徴を捕らえている。さっき前のページにあった穂波の絵の完成度から見ても、これはかなり期待できる。

「これ、借りてもいいか？」

「はい。お願い・・・します」

勝は、デスクに戻るとさっき眺めていた書類の中から1枚の写真を取り出し、絵と並べた。

多少雰囲気の違いはあるが、それは1週間前の事を思い出して書いたからだろうし、服装も喪服という事もあるのだろう。だが、この絵と写真。同一人物と考えてもおかしくない。

「まいったな。澤井はどんな育て方をしたんだ？」

下手したら似顔絵捜査官（？）より上手な絵に、勝は大きな溜息をついた。

「篠原澄さん？警察のものですが、少しよろしいですか？」

澄は驚いたような表情を浮かべたが、体をずらし、勝を家の中に招き入れてくれた。まるで、ここに来るのを予想していたのではないかと錯覚してしまうほどに素早い行動だ。

「で？警察の方が何か？」

「澤井穂波さんをご存知ですか？」

「・・・・・・」

予想外の質問に澄が大きく目を見開く。勝は再び同じ質問をした。だが、声の強さが違う。決して逃がさないといわれているような気がした。

「・・・・・・穂波・・・・・のこと？心のことではなく？」

「ええ。澤井さんとは、お知り合いで？」

「・・・・穂波は俺が勤めている中学に通っていましたから。当時は澤井ではなく田神でしたが・・・。ある意味目立っていましたし。」

「という事は被害者と澤井も？」

「穂波を疑っているんですか？穂波は心との接点はありませんよ。」

「同じ中学で？」

「一体何人生徒がいると？特に俺たちが１０年以上勤めていた間に何人の生徒を送り出したと思ってるんです？」

言っている事は確かにごもっとも。だが、どこか違和感をぬぐえない。

「あなたは、覚えていたのでしょう？斉藤心の葬式であっていたのを目撃されているのですが？」

「・・・・名前を名乗られるまではわかりませんでしたよ。さっき

も言いましたが穂波はどこか浮いた生徒でしたので、名前くらいは覚えていましたが、穂波が転校してあの学校を去って１０年ですからね。」

「転校？」

「両親の仕事の都合だと聞いていますが」

「わかりました。・・・それと、澤井の妹との面識は？」

澄は一瞬顔を顰め、目をしばたたいた。これこそ予想外の質問だったのだろう。その反応を吟味するように、見ていた勝と目が合うと、澄は小さく息をついた。

「澤井心愛。俺が穂波といたといったのも彼女ですか？よく俺とわかりましたね。その時が初対面だったのに」

何とか搾り出すような声。すっと目を細めた勝は小さく頷いた。

「ええ。ところで、澤井心愛を見て、あなたが酷く驚いていたようだったと証言しているのですが？」

「・・・・・・・私が知る澤井穂波よりいくらか幼かったですが、酷く似ていましたからね。他には？」

「いえ。もう結構です。ありがとうございます」

一礼して澄のところを後にする。小さく息を吐いた。全てがうそだとは思わない。だが、嘘がかなり混ざっているであろうことは、容易に想像ができる。澄の証言には多少なりとも、ちぐはぐな部分

が存在している。

勝は何かとんでもないことを見落としているような気がした。

大切な妹に連絡一つ無く姿を消した、澤井穂波が何を考えているのか、いまの勝には想像することすらもできない。

０９：破滅の足音（前書き）

残酷表現含みます。・・・この話って全年齢対象でいいのかな・・・？？？

０９：破滅の足音

「アンタか」

背後からかかった声に、穂波はゆっくりと振り向いた。

今、穂波がいる場所は、斉藤心が埋まっている場所だ。司法解剖が終わりこちらに遺骨が埋められたのはわずか数時間前だったと聞いている。

手紙を握り締め、顔を真っ赤にして怒り狂っている男に穂波は柔らかな笑みを浮かべた。だが、目だけは油断なく男をにらみつけている。

「いらっしゃい。富岡悟さん」

口元に妖艶な笑みを浮かべる。

「な・・・ふざけるな！？この手紙は何だ！？」

「書いてあるとおりだわ。あなたが、斉藤心を殺したのでしょう？」

穂波は右手に持つ紙をひらひらと振った。

「以前、道であなたとぶつかった時に毛髪をとらせてもらったの。その毛髪と先・・・斉藤心のすぐそば・・・乾いた血の中に浮いていた毛髪とが一致したわ。有力な証拠となるでしょうね」

男はあたりをキョロキョロと見回している。逃げ道を探している

のか・・・それとも・・・人がいないかを確認しているのか。

暫くすると、面白そうに笑った。

「あの男は殺されて当然の男だ。で？貴様、何の用だ？訴えるならそれをもって警察へ行けばよかった。そうしないんだから何か別の用があるんだろう？金か？」

穂波がすっと目を細める。しばしの沈黙。それを破ったのは穂波だ。

「お金は要らないわ。それより一つ気になるの。斉藤心のせいであなたの子供が自殺をしたのは、5年前よね？それが原因なら何故今更復讐をするの？」

「・・・・・・・・」

「リストラされたから？妊娠して自殺した事を、その原因が担任教師だと5年前に公表しなかったのは、会社の重要ポストについているのにそれが原因でリストラされたくなかったから。そして、今回そのことがばれてリストラの対象に入ってしまった。違う？」

「そうだ。あの男のせいでリストラされたんだ！？」

男の怒鳴り声が鳴り響いた。穂波はそっと息をついた。予想通りの展開に嫌気さえ感じる。

「逆恨みね。あなたの復讐の理由がいっそ、純粋に娘のためだったなら許せた」

自分の言葉に穂波は内心否定の声を出した。本当に許せたか。答えは否。穂波にとって斉藤心は何よりも愛しい人。たとえ騙されただけの関係であったとしても、穂波にとっては暗闇を照らしてくれた光なのだ。生きているだけでよかった。それだけで、生きていく力となるのに。それを奪った男を穂波は許す事が出来ない。

穂波はポケットから拳銃を取り出し相手に向けた。

さっきまでの笑みが消え、鋭く獲物を睨みつける目になっている。

悟が一歩下がる。

「逃がさない。私は・・・・あなたが許せない。あの人を奪ったあなたに、死の最後を。」

何のためらいも無く、引き金を引いた。

「お姉ちゃん!?・・・・・ちが・・・・う・・・・おかあさ・・・・ん・・・・」

穂波は一瞬驚きの表情を浮かべた。だが、小さく微笑み拳銃の銃口を自分の米神に当てる。

パーーーーン。

遠くで悲鳴が聞こえた。だが、それを認識するよりも早く、穂波の意識は闇へと消えていった。

１０：破滅の足音２（前書き）

残酷表現含みます。

タイトルの話数変更しました（と言うか間違えていたので修正しました）

１０：破滅の足音２

「お姉ちゃん！？」

心愛が朝起きると香ばしい臭いが鼻腔を刺激した。

希の家に長くお世話になるのはどこか気が引け、２日間だけ泊まっただけで後はこの家に帰ってきていた。帰って来た本当の理由は姉が帰ってくるのを待っているためだった。たとえ今は連絡無く姿を消していても、いずれ戻ってくる。完全にいなくなったりはしない。心愛にとって穂波はそうはっきりと言えてしまうほどに信頼できる人物なのだ。

心愛が部屋にとびこむと誰一人その場にはいなかった。ただ、朝食がきっちり１人分用意されている。

「帰って来たの・・・・？」

その答えはない。心愛は穂波が用意してくれたであろう朝食を食べ、片付ける時になって、お盆の下に、隠すようにして便箋がおかれていることに気がついた。朝食の片づけをするまでは気がつかない位置だ。

真っ白なシンプルの封筒の表に「澤井心愛様」と姉の良く見慣れた文字で書いてあり、裏に「澤井穂波」と記されている。

心愛は慌てて手紙を中から引っ張り出した。

何枚にも渡る便箋にびっしりと文字が書かれている。

心愛、この手紙を読んでいるという事は朝食を食べ終わった頃だと思います。私は、いい姉ではありませんでした。そして、今から最低の人間になります。自分が産んだ我が子にここまでの苦行を強いる最低の母親です。これを読めばもう、私はあなたと会う事はないでしょう。だから、ここでやめないで、最後まで読んで欲しいの。ここに書く事は全部本当のことです。

さっき、「私が産んだ我が子」と書きましたが、それが心愛です。心愛は私が中学生の時に妊娠して産んだ子供、そして、母が力を貸してくれて表向き、母と父の子として誕生したのが心愛です。

私は昔から他人とのかかわりが苦手で、人と関わる事が皆無と言っても過言ではありませんでした。友達を作ることが出来なくて、いつも1人で本を読んでいた私に声をかけてきてくれたのが・・・あなたの小学校の先生でもあった斉藤心先生でした。彼は私の中学の時の先生でもあり、私に感情を、愛しいという思いを与えてくれた人でした。

私は、彼を愛しました。誰よりも深く。彼も私を愛してくれていると思っていました。それが違うのだとわかったのはあなたの妊娠が発覚した時です。彼は表情一つ変えずに降ろせといいました。

あの人は女なら、体の関係を持つことが出来る女なら誰でもよかったのです。特に中学生は避妊の知識が皆無ですから。騙しやすか

ったのでしょう。

否定され、騙されたのだと知っても私が彼を嫌う事はありませんでした。

愛していたから、例え、彼が私を見てくれなくても、愛してくれなくても、彼を私が愛したという証、少しでも彼が私を見てくれたのだという証を残したかった。あなたの名前の心愛は「心を愛する」という意味の、私に対する戒めです。

母も初めは反対していましたけど、当時の私の担任の先生が、擁護してくれました。父との離婚というリスクを追ってなお、私を・・・心愛を守ってくれました。

私は今でも先生を愛しています。先生は私と分かれてからも多くの女生徒を傷つけ、自殺した生徒さえいました。でも、私は愛しているの。だから、許せない。

ごめんね、心愛。こんな形で姿を消す私を許せとは言わない。憎んで、忘れて。これからさきあなたの歩む未来に幸福がありますように。

心愛の目からは涙が溢れていた。

「おと・・・さん・・・。おか・・・さん・・・？」

父も母も知らずに育った心愛。両親の愛など受けられないと思っていた。でも、本当は違った。穂波がきちんと愛してくれていた。

心愛は手紙をそのままに立ち上がった。穂波が復讐するつもりなのだと、犯人に気がついて復讐をするために姿を消したのだとわかってしまった。そして、もう2度心愛のところに来るつもりがないのだという事も。

心愛は家を飛び出した。何故なのかわからない。でも、穂波が復讐を果たすならば心のお墓以外に考えられなかった。

「・・・・・おい！？」

墓地に入ったところで背後から腕を取られた。どこか困惑したような表情で勝が心愛を窺っている。

「新藤・・・さん・・・」

「どうした？」

「お姉ちゃんが・・・止めないと」

「！？どこにいるのか分かるのか！？」

勝が顔色を変えた。もしかしたら、彼がここに来たのは、穂波が犯人に繋がる何かを残したからなのかもしれない。

「多分・・・先生のお墓」

勝が駆け出し、心愛が後を追った。

パーーーンと鋭い銃声が響き渡った。

「おね・・・ちゃん・・・？ちが・・う・・。お母さん・・・」

銃を構える穂波の姿に心愛の目はクギヅケになった。穂波の目はどこか空ろで、心愛が知る彼女とはかけ離れていた。

小さな笑みを浮かべ、穂波が自らのこめかみを撃ち抜く。

心愛の口から鋭い悲鳴が出た。

人形のように倒れていく穂波を最後に、心愛の意識はブラックアウトした。

11：澤井穂波という人間

「何故、嘘をついたんです？」

晴れた良い天気の日だった。穂波の葬式は心の時とは違い、ほとんど人のいない静かな様子だった。ただ、義理で来ている人間もほとんどいなくて、全員が暗く沈んだ顔をしている。

そんな中でまるで送り火を送っているかのように煙草に火をつけ、煙が天に昇っていくのを見ていた澄に声をかけてきたのは勝だった。

「何の話ですか？」

「澤井と斉藤心がほとんど面識が無かったと言ったことと、澤井が転校した理由です」

「え？転校理由？」

「両親の仕事のためと言っていたでしょう？でも、実際その時仕事をしていた父親は離婚して家を出ていて一緒に住んでいたのは専業主婦だった母親だけだったはずです。・・・・転校の理由は子供を産んだからですか？」

澄が軽く目を見開いた。一瞬穂波が眠っている方へ目をやり再び勝を見る。

「今更関係ないでしょう？」

「あの時に話してくれていれば止められたかもしれません」

多少の怒気を含んだ声に澄は目を閉じ、瞠目した。顔には疲れたような表情と、深い悲しみの表情が浮かんでいる。

「無理ですよ。どの道あの男を殺して、自殺していました。・・・・しいて言うなら、子供の前でやるのだけはやめてほしいかったですけど」

どこか納得が出来ないような勝の様子に、澄は小さく息をつく。あの時の彼らを知らなければ、それもわかる。だけど、心にとってはどうだか知らないが、穂波にとって心は命よりも大切なものだった。

「穂波は、大人しい生徒でした」

突然始まった昔話に、勝が怪訝そうな表情を浮かべたが、澄はそれを無視して、ポツリポツリと語った。

「誰とも関わろうとせず、まるで体の周りに分厚い壁を築いているようでした。そのせいか、生徒からも教師からも敬遠されるような存在でした。毎日のように図書室に通っては本を読んでいて、1人で過ごしていた穂波に声をかけたのが心です。他人との間に壁を作っていた穂波が、心の前でだけは普通の女の子でした。心がいる時だけは穂波に声をかけようとする人間さえいるくらいなんですから」

一旦言葉を切って目を閉じる。そうすればあの頃の穂波が浮かんでくる。

「子供を妊娠したと聞いた時、俺、またかって思いました。あいつが妊娠させたの1人、2人じゃありませんから。でも、絶対に産む

んだと担架を切ったのは穂波だけです。いつも俯いていた穂波が始めて人の眼を見て話していました。・・・・・心が穂波を変えたんです。穂波にとっておなかを痛めて産んだ子供より、心が好きだった」

勝は言葉を失ったように立ち尽くした。２人の男はずっと長い時間、外で空を見上げていた。

「あの・・・・」

その沈黙を破ったのは今にも泣きそうな顔の希だ。

「どうした？」

「心愛・・・見ませんでした？ずっと様子がおかしかったのに・・・・今どこにもいなくて・・・・」

勝と澄の顔色が変わる。穂波の死を間近で見て、意識を失った心愛。

病院のベッドで目を覚ました心愛は昔の穂波以上に他者を拒絶し、まるで人形のような空ろの目をしていた。

「希ちゃん。もう一度寺の中見てみて」

「俺たちは外、探してみるから」

希に指示を出し、勝と澄は同時に外に向けて駆け出した。何の指示もせず、相談もせず、別々の方向に走り出す。

嫌な予感がする。どうか、今回は厄介な事になる前に間に合ってくれ・・・・と心の底から願った。

12：父親

「まったく、本当に恥さらしの子供だよ」

怒気を含んだような声に勝の足は止まった。今日勝が会った人の中にこの声の持ち主はいない。悲しみじゃなくて、恨みにさえ思っていそうな人間など、勝は知らない。

「挨拶も出来ないのか？親子揃って・・・・。まあ、いい。どの道お前を引き取る人間などいないだろう？好きで戸籍上の父親であるわけでもないのに・・・」

続いて聞こえた声に勝の表情が、今度こそ消えた。

『・・・・これが、今回の事件の真相です。勝手な行動をして申し訳ありませんでした。どうか、私がいなくなった後は、心愛をお願いします。心愛を愛してくれる人なら誰でもいいんです。ただ・・・私の父親だけは近づけないで下さい』

穂波がよこした手紙の最後の文が頭に浮かんでくる。

勝が彼らの前に姿を現すと、心愛は空ろな瞳でぼんやりと男を見上げていた。男の方は憎々しげに心愛を睨みつけていた瞳を勝に向ける。

この男が穂波の父親、田神忍なのだろう。

「ここ・・・・・」

「心愛ちゃん！？」

後ろから女の声が聞こえ、勝の側を通り過ぎた。若い・・・穂波と大体同じくらいだろうか。その女性は心愛を抱きしめる。

「心愛ちゃんを誰が引き取るとしてもあなたでないことだけは確かです」

「なんだと・・・・。貴様・・・無関係な人間は引っ込んでろ」

「無関係ではありません。私は、加賀呉羽。穂波さんから、あなたを心愛ちゃんに近づけるなと頼まれましたから」

「フンッ。そう頼んだところで、貴様もコレを引き取る気などないのだろう？こんなお荷物引き受ける人間など・・・・」

「私が引き取るといわなかったのは、心愛ちゃんを引き取りたいのが、私だけではないからです。お引取り下さい」

「な・・・・」

片手を振り上げた忍の手を勝が掴む。力を入れて握ると、忍の顔が苦痛に歪んだ。

「これ以上は、やめたらいかがです？私としても、虐待の可能性がある人間にこの子を引き取らせるわけにはいきませんから。それに、ご心配なく。心愛ちゃんを好きな人間はたくさんいます。全員が引きとってもいいと思っていますよ」

呉羽に目をやり、背後に心配そうな表情で立っている霧島夫妻と

希、澄、真砂が立っている。

勝が手を離すと忍は小さく舌打ちをしてその場から逃げるようにかけていった。

「ここ・・・」

「心愛ちゃん？」

またもや遮られた。勝の顔が歪む。それに真砂がにやりと笑った。

「新藤警部は・・・事件でもない限り人と話すのは苦手ですからね」

「煩い」

澄が心愛の前に膝をついている。

「ねえ、俺と来る？」

表情を全く変えなかった心愛が目をまん丸に見開いた。

「本当は、もっと落ち着いてからと思っていたんだけど・・・・。もし、君がここに・・・・お姉さんとの思い出の場所に住みたいのなら、止めない。君を受け入れてくれる人間は多いから。少なくともここにいる人間は田神・・・・澤井穂波を好きだし、心愛ちゃんのことも好きだ。ただ、この場所を離れたいのなら・・・俺とおいで」

「どこ・・・に？」

「長野県」

次の瞬間、全員があんぐりと口を開いた。まさか長野県とは・・・・。

「長野・・・？」

「ああ、俺は今度そっちに転職決まってるから。別に心愛ちゃんを閉じ込めるわけじゃないから、ここにいる人間とはいつでも会えるさ」

「・・・・おじさん・・・・だれ？おねえ・・・ちゃんの・・・友達？」

「そうだよ。」

「ここは・・・いや・・・。毎日夢・・・見るの。お姉ちゃんが・・・何か言って・・・・倒れるの。血だらけで・・・・」

澄はどこか痛々しい表情で心愛の頭を撫でた。

「彼女も傷ついてるだろうね」

「え？」

「彼女は・・・ずっと俯いて、周りから壁を作っていた穂波は君を産む時だけは頑として譲らなかった。何があっても、絶対に産むと言って。・・・・穂波は君を愛しているよ。だから・・・君の前で死ぬ予定じゃなかったはずだ」

ボロボロと涙をこぼす心愛。澄は慌てた。

「あ・・・・俺なんかやばい事言った？」

呉羽を見る。

「穂波さんの死を思い出させました」

「あ・・・・・」

「でも、それでよかったんだと思います。心愛ちゃんは、今、初めて泣きましたから」

エピローグ

「希ちゃん・・・・だったよね？」

小学校のランドセルを背負い、沈んだ面持ちでとぼとぼと歩いていた希は澄の姿を見て、あんぐりと口を開いた。希が澄と会ったのはお葬式の時だけ。しかも、直接話したことはない。

「・・・・穂波さんの・・・・・」

確か友達だと言っていたが、穂波と彼では随分と年が違うように見える。どういう関係なのか希には想像もつかない。それ以前に、希は今回穂波が自殺をしたと言うのしか聞いていない。何故そうなったのか・・・心愛が何を知って何を見たのか、誰にも尋ねる事が出来なかった。心愛は当然のことながら、両親にも。

だが、目の前にいるのは希にとっては初対面に等しい、知らない人間。彼なら遠慮せずに聞ける。旅の恥は掻き捨てという感じだ。

「篠原澄だよ。はい、これ」

澄は希の手に1枚の紙を握らせた。

「これ・・・？」

「長野の家の住所。今は心愛ちゃんが不安定状態だから、君に住所を教えるとは思えないし。でも、君は心愛ちゃんにとって最も親しい人間だからね。・・・・来週の日曜日に出発するよ」

「あの・・・・何が・・・心愛や穂波さんに何があったんですか？」

驚いたように目を細めた澄はまじまじと希を見下ろした。

「君は・・・小学生だったね。まだ、早いよ」

「え？」

「そうだね、君が中学か・・・高校生になった時にご両親に聞いてごらん。多分、今の君じゃ理解できないから」

「それじゃあ、何で心愛を引き取ろうとしているのか聞いてもいいですか？」

「？」

「穂波さんの友人なのはわかりました。でも、あなたはつい最近までは全く手も足も出さなかったのに・・・何で今更」

澄の顔が傷ついたように歪んだ。その表情を見て希の顔も同じく歪む。見ず知らずの人間でも、人だ。傷つく。何故それに思い至らなかったのか。

何が澄の気に触ったのか、わからない。ただ、言える事は一つ。希は澄をひどく傷つけたらしい。

「そう・・・だね・・・。罪滅ぼし・・・かな」

「・・・・・・罪滅ぼし・・・・・」

希がその言葉を口の中で転がしているうちに、澄はきびすを返してしまった。その背後から、希が最も澄に伝えたかった事を言った。

「心愛をお願いします。・・・・愛して、育てて・・・・幸せにしてください」

澄は振り向かずに軽く手を上げただけだった。でも、希にはそれが了承の返事だとわかった。

希の頬に涙が流れる。

希が心愛と再び出会えるのは、いつになるのか・・・・。それは、神のみぞ知る。

エピローグ（後書き）

今までありがとうございました。『彼岸花』はこれにて完結です。
続編を載せる・・・可能性もあります（まだ判りませんが）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6703s/

彼岸花

2011年10月8日11時05分発行